故（鲁迅作品日文版） PDF转换可能丢失图片或格式，建议阅读原文

https://www.100test.com/kao_ti2020/245/2021_2022__E6_95_85_E9_83_B7_EF_BC_88_E9_c105_245728.htm わたしは寒を冒して、二千余里を隔て二十余年もれていた故にって来た。はもう冬の最中（さなか）で故に近づくにって天は小（おぐら）くなり、身を切るようなが船室に吹きんでびゅうびゅうとる。苫の隙から外をると、黄いろい空の下にしめやかな荒村（あれむら）があちこちに横たわっていささかの活もない。わたしはうら悲しき心のきが抑え切れなくなった。おお！ これこそ二十年来ときどき想い出す我が故ではないか。 わたしの想い出す故はまるきり、こんなものではない。わたしの故はもっと佳（よ）いところが多いのだ。しかしその佳いところをすには姿もなく言もないので、どうやらまずこんなものだとしておこう。そうしてわたし自身解して、故はもともとこんなものだと言っておく。――はしないがわたしの感ずるほどうら悲しいものでもなかろう。これはただわたし自身の心境の化だ。今度の省はもともと何のたのしみもないからだ。 わたしどもが永い身内と一にんでいた老屋がすでに公され、家を明け渡す期限が本年一ぱいになっていたから、ぜひとも正月元日前に行（ゆ）かなければならない。それが今度の省の全部の目的であった。住みれた老屋と永して、その上また住みれた故にくれて、今食いぎをしているよそ国に家移りするのである。 わたしは二日目の朝早く我が家の口に著（つ）いた。屋根瓦のうえに茎ばかりの枯草がに向って（ふる）えているのは、

ちょうどこの老屋が主を更（か）えなければならない原因を明するようである。同じ屋敷内（うち）に住む本家の家族は大概もう移したあとで、あたりはひっそりしていた。わたしが部屋の外まで来た、母は迎えに出て来た。八になる甥の宏（こうじ）も出（とびだ）して来た。 母は非常に喜んだ。何とも言われぬ淋しさを押包みながら、お茶を入れて、をよそ事にらしていた。宏は今度初めて逢うのでくの方へ突立って真正面からわたしをていた。 わたしどもはとうとう家移りのことをした。「あちらの家も借りることに（き）めて、家具もあらかたえましたが、まだ少し足らないものもありますから、ここにある嵩物（かさばりもの）をって向うでうことにしましょう」「それがいいよ。わたしもそう思ってね。荷（にごしら）えをした、嵩物は持びに不便だから半分ばかりってみたがなかなかお（あし）にならないよ」 こんなをしたあとで母はをいだ。「お前さんは久しぶりで来たんだから、本家やに暇乞いをまして、それから出て行くことにしましょう」「ええそうしましょう」「あの土（じゅんど）がね、家へ来るたんびにお前のことをきいて、ぜひ一度逢いたいと言っているんだよ」と母はにこにこして「今度到著（とうちゃく）の日取を知らせてやったから、たぶん来るかもしれないよ」「おお、土！ ずいぶん昔のことですね」 このわたしのの中に一つの神さびた画面がき出した。深色（はなだいろ）の大空にかかる月はまんまろの黄金色（こがねいろ）であった。下は海の砂地に作られた西瓜（すいか）で、果てしもなき碧の中に十一二の少年がぽつりと一人立っている。（えり）には

のをけ、手にはの叉棒（さすぼう）を握って一疋（ぴき）の土（もぐら）に向って力任せに突き刺すと、土は身をひねって彼の跨（また）ぐらを潜（くぐ）って逃げ出す。 この少年が土であった。わたしが彼を知ったのは十つかのであったが、れて今は三十年にもなる。あの分は父も在世して家事の都合もよく、わたしは一人の坊ッちゃまであった。その年はちょうど三十何年目に一度って来る家（うち）の大祭の年に当り、祭は重をめ、正月中げられた影像の前には多くの供え物をなし、祭器の撰が八釜（やかま）しく行われ、参人が沓（ざっとう）するので泥棒の用心をしなければならぬ。わたしの家（うち）には忙月（マンユエ）が一人きりだから手りかね、祭器の番に（せがれ）をよびたいと申出たので父はこれをした。（この村の小作人は三つに分れている。一年契の者を年（チャンネン）といい、日雇いの者を短工（トワンコン）という。自分で地面を持ち期や刈入にに人の家に行って仕事をする者を忙月（マンユエ）という） わたしは土が来るといて非常に嬉しく思った。というのはわたしは前から土の名前をき及んでいるし、年もわたしとおつかつだし、月（うるうづき）生れで五行の土が欠けているから土と名づけたわけも知っていた。彼は仕で小を取ることが上手だ。 わたしは日々に新年の来るのを待ちかねた。新年が来ると土も来るのだ。まもなく年末になり、ある日の事、母はわたしを呼んで「土が来たよ」と告げた。わたしは（か）け出して行ってみると、彼は炊事部屋にいた。紫色の丸！ に小さな漉帽（すきらしゃぼう）をかぶり、にキラキラしたの（くびわ）をけ、――

これをても彼の父がいかに彼をしているかが解る。彼の死去を恐れて神にをけ、にをけ、彼を庇しているのである――人をて大はにかんだが、わたしにして特だった。もいないに好くをして、半日たぬうちに我々はすっかり仲よしになった。 われわれはその、何か知らんいろんな事をしたが、ただえているのは、土が非常にハシャいで、まだたことのないいろいろの物を街へ来て初めてたとのだった。 次の日わたしは彼にをつかまえてくれとんだ。「それは出来ません。大雪が降ればいいのですがね。わたしどもの沙地（すなぢ）の上に雪が降ると、わたしは雪をき出して小さな一つの空地を作り、短い棒で大きな箕（み）を支え、小米を撒きちらしておきます。小が食いに来た、わたしはくの方で棒の上にってあるを引くと、小は箕の下へ入ってしまいます。何でも皆ありますよ。（いねどり）、角（つのどり）、※（のばと）［＃「孛＋」、105-11］、背（あいせ）……」 そこでわたしは雪の降るのを待ちかねた。土はまた左（さ）のようなをした。「今は寒くていけませんが、夏になったらわたしのへ被入（いら）っしゃい。わたしどもは昼海に取に行きます。赤いのや青いのや、鬼がて恐れるのや、音の手もあります。にはお父さんと一に西瓜のりに行きますから、あなたも被入（いら）っしゃい」「泥棒のをするのかえ」「いいえ、旅の人が喉がいて一つぐらい取って食べても、家（うち）の方では泥棒の数に入れません。が要るのは猪（いのしし）、山あらし、土の（るい）です。月明りの下でじっと耳を澄ましているとララといて来ます。土が瓜をんでるんですよ。そのあなたは叉棒を攫

（つか）んでそっと行って御なさい」 わたしはそのいわゆる土というものがどんなものか、そのちっとも知らなかった。――今でも解らない――ただわけもなく、小犬のような形で非常に猛烈のように感じた。「彼は咬（か）みついて来るだろうね」「こちらには叉棒がありますからね。いて行ってつけ次第、あなたはそれを刺せばいい。こん畜生は鹿に利巧な奴で、あべこべにあなたの方へけ出して来て、跨の下から逃げてゆきます。あいつの毛皮は油のように滑（すべ）ッこい」 わたしは今までこれほど多くの珍らしいことが世の中にあろうとは知らなかった。海にこんな五色（しき）のがあったり、西瓜にこんな危性があったり――わたしは今の先（さ）きまで西瓜は水子屋の店にっているものとばかし思っていた。「わたしどもの沙地の中には大潮の来る前に、たくさん跳ねが集（あつま）って来て、ただそれだけが跳ねっています。青蛙のように二つの脚があって……」 ああ土の胸の中には限もなく不思なががっていた。それはふだんわたしどもの往来（ゆきき）している友の知らぬことばかりで、彼等は本当に何一つ知らなかった。土が海にいる彼等はわたしと同じように、高にまれた屋敷の上の四角な空ばかり眺めていたのだから。 惜しいかな、正月はぎ去り、土は彼の里にることになった。わたしは大哭（おおな）きに哭いた。土もまた泣き出し、台所にれて出て行くまいとしたが、遂に彼の父に引り出された。彼はその後父に（ことづ）けて一包（つつみ）と事なの毛を何本か送って寄越した。わたしの方でも一二度品物を届けてやったこともあるが、それきりをたことがい。 在わた

しの母が彼のことを持出したので、わたしのあののが（いなずま）の如くよみがえって来て、本当に自分の美しい故をきわめたようにえた。わたしは声にじて答えた。「そりゃ面白い。彼はどんなです」「あの人かえ、あの人の景もあんまりよくないようだよ」 母はそういいながら室（へや）の外をた。「おやまたか来たよ。木器（もくき）うと言っては手当り次第に持って行くんだから、わたしがちょっとて来ましょう」 母が出て行くと外の方で四五人の女の声がした。わたしは宏を（そば）へ（よ）んで彼とをした。字がけるか、この家（うち）を出て行きたいと思うか、などということをいてみた。「わたしどもは汽にってゆくのですか」 100Test 下载频道开通，各类考试题目直接下载。详细请访问 www.100test.com